
零の錬金術師

時雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零の錬金術師

【Nコード】

N9457Y

【作者名】

時雨月

【あらすじ】

気づいたら、中將になつていて、軍の狗で、記憶がなくて……！？
生きながらもアメストリスの歴史に名を刻む、
天才錬金術師、「イリア・レッドスパ」に転生した！
漫画のことは覚えているのに、自分のことは何も覚えていないという体たらくさに
殺意を抱きながらも、大佐の子守をしたり、
鋼の錬金術師と鎧君にご飯作ってあげたりいろいろ大変な主人公が
苦しい言い訳でその場その場を一生懸命切りぬけていくお話。

第零話

真っ白く、果てしなく、朽ちることなく。

どこまでも白いこの空間。

私は一人立っていた。

「……どっ」

お父さん、お母さん、辺りを見渡しながら、強気に呼ぶ。

恐怖感をはねのけるように。

孤独感を味合わないように。

強気な顔の少女の顔にも、段々と恐怖が浮かんでくる。感情、心を孤独、恐怖にむしばまれる。

「誰か、返事してよ……誰か……お願いだよ……！」

ぼろぼろと涙があふれ出る。

声を出してなく彼女に、寄り添う者はいない。

代わりに、声がかかる。

「返事してやったぜ」

真後ろから声がかかり、少女はその小さくか細い体を大きく揺らし、涙にまみれた顔で、声がした方を振り返る。真っ白な何かは、わざとらしく肩をすくめる。

「おいおい、泣くなよ」

「ひぐつ……うえ……あなた、誰……？」

少女が問う。

白いものは、待ってましたと言わんばかりに口角を上げる。

「世界」「宇宙」「神」「真理」「全」「一」などと呼ばれるモノだ」

少女は訳が分からないという顔をする。

「なんで、私はここにいるの…？」

「人体錬成。最大の禁忌を犯したからだ、惨めな錬金術師よ」

意識は、そこでぷつりと途絶えた。

対価は、
痛覚。

第零話（後書き）

真理君は、感覚がほしくなっただようです。
イリアさんの対価は、痛覚です。

第一話

「う…………ぐう……………」

目が覚めた。

「……………」

いやな夢を見た気がする。

自分が死ぬところを見たかもしれないし、他人が死ぬところを見たのかもしれない。

記憶をたどるが、手がかりになりそうな糸は全く見つからない。

『思い出せないからこそ悪夢』

誰かがそんなことを言っていた気がしなくもない。

そんなどうでもいいことを、起きたすぐに考えたせいか、

少し、というか、かなり頭が痛い。

とりあえず、何か食べようと思う。

何か、違う気がした。

ただの思い込みではなく、それは必然的に。

確かに、違っていた。

頭を押さえながら、天井に目をやる。

天井の色が、無機質な白だった。

とても感情なんてない（天井に感情なんてあるのか？）、無機質な白だった。

音楽でいうと、特に何も無い、ただ、音が鳴っているだけの様なものの。

確か、私の部屋は、薄いレモン色だったと思うんだけど……

小さく、か弱くも、それなりの音楽は奏でていたはずだ。

いや、音楽なんて今はどうだっていい。

ここは確実に私の部屋ではない。

「……………」
「？」

私。

それは自分のことをさす言葉。

私。

私は、誰……………？

血が下がっていく気がした。それはもうストン、と。

思わず、口に手を添える。

私は誰？ここはどこ？

「記憶喪失……………！」

とりあえず、上半身を起こしてみた。

頭がククラするが、今はもう、大した問題ではない。

私はソファに寝ていたみたいだ。

革製の奴で、とても冷たく心地よい。

何かの部屋みたいだ。

真っ白な壁に、茶色のドアが、ひとつついている。

黒の仕事に使うようなデスクが一台置いてあり（ここは仕事部屋か？）、その後ろには

大きめの窓があり、そこからは、赤や黄色の落ち葉が散っているのが見えた。

大きな棚に仕事に使われるような資料がズラリと並べられている。

私は、部屋を一望する。

一通り見渡したところで、一度見た、資料の棚を、再び見る。

ん、ちょっとまで。『イシュヴァール』で書いてあるのは気のせい
か？

私は体を起こし、その資料を手にとってみる。

パラ……と音を立て、ページがめくれる。

「本物……」

これはハガレンじゃないですか!?(混乱中)

どうしよう、ていっかなぜ自分のことは覚えてないのに漫画のことは覚えてんのさ。

「とりあえず」

どうしようか。

顎に手を当てながら、探偵気分でそんなことを思っていると、

ドアがガチャリと音を立てて開く。

「……………!?!」

首がもげんばかりの勢いで振り向いた私に、ドアを開けた

金髪で、背筋がピシリと伸びた、見るからに完璧な雰囲気漂う美人さん……………

リザ・ホークアイは目を大きく見開く。

お互いに、お互いの行動が予想外だったため、数秒フリーズする。

私よりも早く現実に戻ったりザが、話しかける。

「どうされたのですか？ 中将」

……ここまで来て夢オチというのはただの逃げるため口実だよな。

まだ納得できていないような気もするが、しょうがない。

とりあえず、私は中将ということだよな。

ということはリザより上だよな、階級。

私は、なるべく平然を装い、苦笑いを浮かべる。

「いや、何でもない。それよりか、私はさっきまで何をしていた？」

第二話

「昨日は大佐のお仕事を徹夜でお手伝いされていたので、仮眠をとると、少し眠られていましたよ」

おお、大佐のサボリ癖は健在か。

確かに大佐のサボリ癖はひどいよな。

どうやったらあんなに資料とか書類とか溜めれるんだ？

まあ、勿論仕事をしなければ仕事はたまるけど。

でも、もうちょっと情報がほしいな。

まだまだ足りなさすぎるんだが。

私は何気なく尋ねてみた。

「イシユヴァール殲滅戦って何年前だったっけか？」

「大丈夫ですか、中将。まだ少し眠られた方が……」

こいつってそんなに頭いいのか。

ちよっときいただけで、疲れているだなんて……

「あはは、ちよっと忘れちゃって……」

頭を掻きながらデスクに座り、足を組む。

するとリザがコーヒーを出してくる。

ちやつちやつと慣れた手つきでコーヒーを入れるリザ。

こんな家庭的な軍人、なかなかいないと思うよ。

「イシュヴァール戦は、今から10年前ですよ」

「ふむ、そしたら……」

さっきの資料を手に取り、再び読む。

私は集中し始めたら、周りのことが見えなくなるようだ。

リザもそのことが分かっているのか、何も話しかけてこなかった。

もつとも、今考えているのは、原作のことだが。

原作開始のときは、イシユヴァール殲滅戦は、13年前って言うてたよな。

じゃあ、原作開始はあと3年後か……………。

「……………」

それまでに軍になじめたらいいな。

私は、窓から景色を眺めながら、そんなことを思っていた。

第三話

「ふう……………」

ため息をひとつつき、読んでいた資料を適当に置く。

『イシュヴァール殲滅戦』

ある軍将校が、イシュヴァール人の女の子を撃ち殺したのが発端。
イシュヴァール人が、内乱を起こした。

イシュヴァールの英雄には、私の顔写真が載っていた。
勿論、それなりに若かったが。

そして、私の名前が分かった。

『イリア・レッドスピア』

零の錬金術師という二つ名を持ち、18にして中将まで上り詰める。

二つ名の由来は、全ての常識を零に還し、零から創りだすと言われているため

空中で錬成陣を切るため、「空の支配者」とも呼ばれている。

「いやな事件だったな」

私がしんみりと呟くと、リザは苦笑いを浮かべながら

「そうですね」

とだけ返した。

『ある軍将校』って、エンヴィーだったよね。

あいつが始まりで、色んな人が、ウィンリィが苦しんで、悲しんで

……

罪のないイシュヴァール人が、沢山殺されて………！

大きく息を吸う。

「あーくそ、駄目だ！ちょっと外行ってくる！！」

ガタンッと音を立て、ドカドカ歩いてドアへ向かう。
開けて、外へ出ようとしたとき、リザから声がかかる。

「そのままいなくならないでくださいね」

かかった声は、どこか悲しげで、心配したようなものだった。

こいつ、前にそんなことした事があるのか？

私はそれに、片手をあげて答えた。

第三話（後書き）

いまだに原作キャラが、リザさんしか出ていないという……！

第四話

秋晴れの今日。

外に出た私は、そこら辺をブラブラ歩きながら、
今日あったことを整理していた。

まず、異世界トリップ

ハガレンの世界にトリップしたからには、死ぬ予定のヒューズさん
とか助けなきゃ。

次に、記憶喪失

漫画のこと以外何も覚えていない。
何で漫画だけ覚えてんだ、私。

最後に自分のこと

イリア・レッドスピアという人物だということを忘れてはいけない。

でも、本当のイリアさんはどこへ行ったんだろう。

向こうの世界の私になっていたり。

「……よし」

悩んでいてもしょうがない。

私は自分の頬を強くたたくと来た道に戻る。

本当に、今日はいい天気だ。

ハイキングとかにちょうど良さそう。

私は、鼻歌交じりに歩くのだった。

第四話（後書き）

はい、短すぎですね。分かってます。

第五話

「キヤアアアアア！！？」

賑わう街から突然の叫び声。

鼻歌を歌いながら帰路を歩んでいた私は、声がした方――後ろを急いで振り返る。

如何にも犯人な男が、

女性もののバックを片手に持ちながらこちらに向かって走ってきた。

「……………」

こっちに向かって。

「ってえええええ！？」

周りの人はいち早く犯人に気づいたらしく、近くには誰もいなかった。

た。

みなさん、分かってたなら教えてよ。

ちなみに今の恰好は、白のパーカーを着、その下に薄い水色のシャツ、

下は、ジーンズ生地のスニーカーを履いている。

つまり、言いたいのはこれだけ見れば、そこら辺にいるような、何の変哲もない

『ジョセイ』なのだ。

私が、軍人。ましてや零の錬金術師だとは誰も気づかないのさ！

「退け退けええええええええええ！」

バックを振り回しながら、叫びながら、走ってくる犯人。

その後ろで何か叫んでいる、被害者の女性。

周りの人間は、あっというような顔をし、慌てて飛び込んで来ようとしている人もいる。

それでも私は動かない。

この『イベント』が、楽しすぎて――――

思わず口角が上がる。

犯人はそれを見てたじろいだが、頭を振り、突っ込んできた。

頭の中に錬成陣が浮かぶ。

複雑な形だ。

これが、私の、イリア・レッドスピアとしての、零の錬金術師の初錬成――――

私は、空中で、両手を複雑に動かし、常人には見えない速さで陣をきる。

皆が、驚いたような顔をする。

私が、錬成陣を描き終わったとき――――

大きな錬成反応が、私を中心にして、街を光で覆った。

第五話（後書き）

実はイリア（主人公）

純粋な戦闘狂だったりします。

でもそれが原因で人殺ししたり、

闘ったりはしません。

売られたケンカは買ってやるみたいな感じです。

第六話（前書き）

一部、というか完全に話が変わりました。

……エド、アルどこいった。

第六話

チノ・ローズ。

錬成の負担は僅かながらも、威力は人間を気絶させるものから、街を全壊できるものもある。

零の錬金術師がよく使う技だ。

この錬成術は、辺りを眩い光が包み込むように輝くのが特徴で、イシュヴァール殲滅戦の際に

イリアが「一瞬で楽になれるように。なるべく痛みを感じないように」と、自ら開発したものだ。

この手にかけて人の命は数え切れない。

というより、数えなくなったというのが正しいのか。

私は人殺し。

何人殺そうと、その事実は変わらないし、変えられない。

小賢しい数字なんかは、人の命は数えられない。

チノ・ローズは、射程距離内のものなら、何でも壊せる。

孤高のような場所から狙えば、確実に死ぬ。

でもそれは、人の死を、この手では感じないということ。

殺しも日常化してしまったこのセカイでの、イリアにとっての唯一の逃避行だった。

「うん、犯罪は感心できないな、というよりいけないことだよな、それくらいわかるよな？ん？」

私は見事な手加減で、犯人を気絶するかしないかの瀬戸際に追いやっただ（怖）。

そいつのふざけた黒のマスクをほぼ引っぺがすようにはぎ取る。

如何にも非行の様な茶色の髪を一瞥し、舌打ちする。

彼此一時間ほど、私が笑顔で言い放つ説教や、時々混ざるロイの悪口を聞かされている

青年は、体を小刻みに震えさせていた。

犯罪は絶対にいけないんだ。

特に記憶もないくせに、そんなことを思った。

まるで、自分が犯罪を犯したことがあるような罪悪感があり、

まるで、自分が犯罪を取り締まったことがあるような、自分でも驚く手際の良さ。

何にも覚えてないくせに。

何にも。何にも。自分のことさえ。

そんなふがない自分腹が立つ。

「はあ、くっそ、最悪だよ全く」

「ヒイっ！？す、すみません！！」

さっきの言葉は、自分に向かっていったのだが。

自分に言われたのだと思った青年は地面がすりきれんばかりの勢い

で土下座して謝る。

まあ、いいか。いい機会だしこの青年に犯罪の罪の重さと
国軍の怖さを思い知ってもらおう。

「あのさあ、誤ってすむ問題じゃないってさっきから何度も言っ
ているはずんだけど」

ずい、と詰め寄り、もうちょっと虐めてやろうとしたところを誰か
に遮られる。

何人かの軍人が、こちらに駆けってくるのが見えた。

全く、何やってんだこの国の軍は。

犯罪者を捕まえるのに、一時間もかけるのか。

文句を言おうとしたら、あのサボリ魔ロイ・マスタングさんがいた。

ちようどいいや、こっちに来てるみたいだから、きっと知り合いだ
よな。

文句ぶちまけてやるーっと」

「遅えよ、クソロイ」

口を尖らせて言う。

「クソとは何だクソとは。女性が口にしていい言葉ではないぞ？ま
してや君ほど美しいのならもう少し言葉を改めた方がいい」

「五月蠅い！それにこんなのもらってくれる物好きなんていねえよ」

「はあ………相変わらず鈍いのだな、まあ、そこがいいという輩も
いるが」

何の話してんだ？そう問うと、ロイはまた、深いため息をこぼす。
いい加減私の好奇心も薄れ、それ以上何もいわなかった。

「おら、コイツどうすんの」

地べたに座り込んだ状態の、強盗犯の青年の腰をコッソ（コッソなんて可愛い表現だ）と蹴る。

「すっかり怯えているじゃないか……何をしたんだ？」

怪訝そうに尋ねるロイに、私はしれつと返す。

「ベーツにい、ロイが来るまで説教してただけだよ」

私が立ち去った後、青年がロイに縋り付く様に抱きついたことなんて、私は知る由もなかった。

第七話

「うううう……」

「はっ、さすがの中将様でも、これだけできないんスね」

眉間にしわを寄せる私に対して、目の前にいるジャン・ハボックは楽しそうな顔をしている。

私の手には、一枚のトランプ。

ジャンの手には、二枚のトランプ。

場所は仕事部屋。

ロイ、リザ、ハイマンス、ヴァトー、ケインで、ババ抜きをしていたのだが、

私とジャン以外のメンバーが、次々に抜けていったのだ。

皆強すぎ。ていうか、この状況理不尽すぎ。

そして冒頭に至る。

私が一枚の、ダイヤのエースのカードを持ち、
ジャンがダイヤのエースと、ジョーカーを持っているのだ。

この勝負で、全てが決まる。

大袈裟かもしれないが、私にとっては大切なことなのだ。

だって、負けたら――――

「この書類を全部片づけなきゃいけないからな！」

「てめーがいうな！てめーが――！」

そう、この勝負が始まったのはほかでもない、このロイのせいなのだ。

こいつがためた書類を誰が片付けるかとロイが言い出し、いやお前だろという皆を無視し

こついうことになったのだ。

「さあ、イリア、早く引けよ」

「ちょ、ちよつと待て……」

ジャンがヒラヒラと動かすカードを凝視しながら、考える。

確率は二分の一。

どちらかが、ジョーカーで、どちらかがダイヤのエース。

しばらくの間、カードを鋭く睨みつける。

「おい、ジョーカー、今なら許してやる！さっさと出てくるんだ！
周囲はすでに包囲してある！！」

「すみません、俺がジョーカーです……って誰がやるかあああああ
！！」

スパンッとハリセンで頭をハイマンスにたたかれる。

畜生、もう少しだったのに……（馬鹿）

うううううう……

クソ、悩んでも仕方がないか……

ぐ、と気合を入れる。

「うおおおー！」

直感を信じ、私から見て右側のぱつとカードを引きぬく。

誰もがつばを飲む。

あの、リザさえも強張った表情をしていた。

私が、ごくりとつばを飲み、覚悟を決め、カードを見る。

カードは………

ジョーカー。

「うわあああああああああああ！！！！！？」

「いよっしゃあああああああ！！！」

上から順に私、ジャンである。
見事にジョーカーを引き抜いた私。

運悪過ぎだよ、このやろー。あははははー（壊）

そのあと、もう見事なまでに、ジャンはダイヤを引き、私はロイが溜めた、

ロイが溜めた（ここ重要）書類を片づける羽目になったのだった。

他のメンバーは、また、ババ抜きを始めている。
何か賭ける話になった様。

「あれ、ロイが片付ければいい話じゃないか？」

ふと疑問に思った、冬の初めの出来事でした。

第七話（後書き）

トランプネタでここまで盛り上げられるとは
実は作者も驚きです（おい）。

第八話

東方司令部の一室・・・・・・・・

私とロイが、ロイが溜めた書類を片付けていた。

原作知ってたから酷いことは分かったけど、ここまでとは………
期限切れてる書類とか、他に回す奴とかあったのに、
ここまでできたら、もう「あれ」としか言いようがないね。

「お前はマルキリ『無能』だな!!」

無能、という言葉を強調して言う。ロイの上に、無能与書かれた岩
が落ちる。

露骨に落ち込んだようだ。でも私は、ある感情しか生まれてこな
かった。

……何この解放感。めっちゃ気持ちいいんですけど。

なんでだか知らないが、ロイはどうやらいじられキャラのようだ。

「あ、イリア」

ロイが言った。というよりこの部屋には私とロイと二人しかいない。

「なんだよ、期限切れた奴でできたか？」

「どうしてそういうことになるんだ、そのことじゃないぞ」

それはあなたがそういうことをするからです。

言いたかったが、話がこじれそうなのでやめといた。

「鋼の錬金術師が、面会をしてほしいといていた」

「私に？」

「ああ、今から連絡取るのもなんだから、直接会いにいったらどうだ？」

「そうだな、よし会いに行こう」

席を立ち、きちんと椅子を入れる。

これは学生時代の教師が全員女で口やかましく礼儀に厳しかったせいだ。

私はそのころが一番嫌いだったなあ。

勉強嫌いだし。

ドアノブに手をかけ、まわそうとしたとき、ロイが話しかけた。

「面会の依頼がきたのは、三か月前だった」

「そっちの方が期限切れてんじゃないかねえかよー!!」

- - - - - 東方司令部廊下

「あのう、」

「何ですか、イリア中将」

「なぜ私は、キンブリーに手をつながれているんでしょうか」

あの後なぜかキンブリーに捕まってしまったのだ。

どうしよう、この状況……

周りの軍人が、チラチラ見てくる。正直言つて嫌だ。

キンブリーはこの様子を嫌がってはいないようだ。

……… 周りにハブられて喜んでいる変態にしか見えないのは、私だけか？

激しく逃げたい。誰でもいいから助けて。この際髭だるまもといアームストロング少佐でもいいや。

「Help」

ただそれだけ、口にしてみた。

第八話（後書き）

意味わからん（え）

なんで下書きと方向が180度違うのー！？

次こそ、鋼の錬金術師君と会います。

関節キスの予定（笑）

第九話

「はあ……セーフ」

見事キンブリーの魔の手から逃れ、今は外に行こうとしているところだ。

今日はついてないな……

トランプでは負けるし、仕事やらされるし、キンブリーに捕まるし。三つ目の出来事がかなり大きい。

私は以外に仕事ができるみたいだ。自分でいうのも難けど。

アメストリス語が読めるのか心配だったけど、頭の中で自動変換されているようにすら読めた。勿論この国の言葉ですべて書いてあるのだが、それを頭の中で理解している。暗黙知、とでも言うておこうか。説明するのは難しい。だけどそれは最初から知っていたことのようにだ。

食堂から、いいにおいがする。

野菜スープの様な、優しい香りだ。思わず歩くスピードが遅くなる。

……ちよつとだけ、食べていこうかな。

この国の食事は、主食が肉で、意外に重たいものが多い。この前、リザと食事した時、そう思った。

元が、このアメストリス国の人間でも、和食中心の日本人にはかなりつらい。

私は最近そういうのしか食べていないため、激しい衝動に襲われる。それに空腹だった腹が、虚しく音が鳴る。

次の瞬間には、食堂に向かって足を進めていた。

- - - - - 食堂

ガヤガヤと、軍服を着た大人がたくさんいる。

こうして考えてみると、私って背が小さいんだな。まあ、この体はイリアのものだが。

私は、恐らく167cm弱。体重48kg。これでも高い方だと思うのだが、周りの人は、さらに高い。ロイとは20cm以上、ジャンとは30cmも違う。見上げなければ、とても顔は見えない。

今なら、エドワードの気持ちかわかる気がする。この状況で、豆だのチビだの小豆だの言われるのは理不尽極まりない。

「ん……」

私がマグカップにスープを注いでもらい、席を選ぼうと辺りを見渡すと、赤いパーカーをはおり、金色の髪を後ろで三つ網にした少年

と、かなり大きい鎧がいた。
もしかして、エドワードと、アルフォンス……？

席を決める振りをしながら近づき、エドワードの隣にスルツと座った。

スープを一口飲む。野菜がこれでもかというほど柔らかくなって、噛まないでも簡単に飲み込める。とても優しい味だ。懐かしい気持ちになれる。懐かしいものなんてないくせに。

とんでもないほどの独り言だ。私は以外にマゾなのかもしれない。

うえ、とんでもなく嫌だ。

視線を感じた。というか感じていた。

まあ、私みたいな赤い髪で、目立つようなやつが食堂なんていたら、視線を集めても仕方がないだろう。まあ、黙っているのも気まずいし、なんか話しかけるか。

「はじめまして、鋼の錬金術師さん？」

にこりと笑いながら告げる。

彼の目が大きく開かれ、アルフォンス君の動きも止まっていた。

おお、驚いてる驚いてる（この状況を一番楽しんでる）。

「あんた、誰だ？」

「あれ、分からない？」

神経を逆撫するようにいう。面会したいって言ってたのに顔知らない

いなんてショックだなあ。

そういえば、イリアはいつも、オールバックだったんだっけ。

今は前髪を下ろし、軽く七分分けをしている。

その前髪をがっとかき上げる。

すると兄弟はあっというような顔をした。

「イリアさん……ですか？」

私はニヒルな笑みを浮かべながら、答える。

「そーだぜ。私に何か用か？」

飲み終わったスープのマグをテーブルに置き、エドワードの前に置かれていた珈琲の入ったコップを手に取り、一気に飲む。そのことに仰天したエドワードは、口を大きく開いたままだ。
コトン、とテーブルに置く。

「てめえ！それ俺のコーヒーだったの！！」

「それぐらい知っている。なに、関節キスが恥ずかしいのか？ん、青春かい？甘酸っぱいねん」

「~~~~~！確信犯かお前はあ！！」

「兄さん！お、落ち着いてっ！！」

「だははははっ、お前らおもしれえ！やっべえ、超受ける！！」

「「イリアさんのせいだろうか！！」」

ははは、兄弟息びったり。

てゆうか、エドワードいじりがいすぎ。

「それじゃ、ここで話すのも難だし、私の家に行こうか」

第九話（後書き）

はあ、文章がまとまらない。

関節キス、もうチョイ派手目がよかったですかね？

第十話

「「うおお……」」

「さ、そんなとこに突っ立ってないで早く入りなよ」

二人は私の家を見るなり、見上げて動かなくなった。まあ、そりゃそうだろう。金持ちのボンボンが別荘に建てるような家なのだから私も驚いたよ？ちゃんと確認したよ？この前ロイと食事に行ったとき、酔いつぶれたふりをして家を案内してもらったんだよ。一気に酔いがさめたね。

でも、ここは私の家であり家でない。それはなぜなら

「ただいま、た・い・さ」

「ああ、イリアか。早かったな」

ああ、兄弟又もや絶句。そんなに驚いてて疲れない？驚かせてるのは私だけどー。

「何で大佐が居るんだよ！！」

一拍間をおいてからエドがかみつく。

「私の家に私がいたら悪いのか？」

「だってここはイリアさんの家でしょう!？」

おお、アルも参戦。

私は優雅に紅茶を楽しみながら、その光景を見る。

なんだか……………親子？

だったらおいしいなあ、兄弟が黒髪か、ロイが金髪かじゃないと……………
ロイの金髪……………？

「（やばい、リアルに想像してしまった……………!）」

想像をかき消し、笑いをこらえるために、一つ咳払いをする。
するとこちらに気がついたみたいだ。

「イリア、すまん。私がいなくて淋しかったろう」

「……………」

「イリア、すまんが無言でフルーツナイフを構えるのはやめてくれ」

「まあいいや。んで、兄弟。聞きたいことがあるんだろう?」

顔を見合わせる。

「あのさ、いきなり本題に入っても構わないか?」

「どうぞ」

「中将ってさ、『人体錬成』したのか?」

その言葉に私はフリーズする。思わずマグカップを握りつぶす。

なんで、知ってる……

トリップしたすぐ後に知ったこと。誰にも見られてないと思ったのに。

「ある憲兵が中将が錬成陣なしで錬成した所を見たって聞いたんだ」

私は何も返せない。返す言葉がない。

どうしようもない。この子たちに、ロイ達に否定されてしまふと思うと。

何も言えない。

こんなつらさを、兄弟はずっと背負ってきたのだろうか。だとしたら、私はなんて情けない。こんな子供より脆いなんて。唇をかみしめてぐっところえる。息を吸い、呼吸を整える。

「

」

そういつた瞬間、その場の空気が固まった。やっぱりこういうことになるんだ。なんだか、体が重い。瞼が閉じる。ロイや兄弟が何かを必死で叫んでいる。自分でも何が起こっているのか分からない。ただ、からだが無かに引き寄せられるように沈んでいく。

暗転する世界の中で最後に見たのは、恨めしそうにこちらを見ている錬成されて醜い姿へと変わってしまった、私の親友だった。

第十一話

「よお、零の錬金術師」

「……」

おかしいな、さっき何か聞こえたんだが。

「おーい、きいてんのかー？」

あれ、私とうとう耳まで悪くなってしまったのかそうなのか。というか耳悪くなつて変な声が聞こえるっておかしくないか？わかった、これは幻聴だ。仕事のやりすぎで耳までロイ菌（？）に侵されてしまったんだ。ああ、なんと哀れな私の耳。

- - - - - 幻聴とは

実在しない音や声のはつきりと聞こえることをいう。聞こえるものは要素的なものから人の話し声、数人の会話と複雑なものまで程度は様々である。てんかんなどでも起こりえるが、会話の場合は統合

失調症の可能性が高くなる。統合失調症では意識障害時ではなく意識清明期におこり、耳から聞こえてくる、頭の中に直接響いてくる、腹部から聞こえてくる場合もある。統合失調症ではただの音であったり知り合いの声、悪口や命令や自分の考えであったり、会話であったり内容は様々である、妄想に結びつくのが特徴である。急性期は鮮明に聞こえるが、軽快するにつれ不鮮明となるため陽性症状の指標ともなる。聞こうとすれば聞こえる、聞こうとしなくても聞こえる、声に逆らうことができないといったことも重症度の目安となる。例として、壁を叩く音が聴こえる等。ウィキペディアより。

「よし、耳鼻科へ行こう」

「人の話聞けよ！！！」

おう？誰かの声が聞こえたぞ？どうやら私の耳は本格的に相当駄目になってきたらしい。これは早急に耳鼻科に行く必要があるな。そういえば早急という二字は、さっきゅうと読む人がいるがどちらがあっているかというとそれなりに難しい問題になるわけでもなく両方あっていると聞いたことがあるわけだがそれすなわち「ばこん！！」「いったあ！？誰だよたらい投げた奴！！！」

「まったく、一人でぶつぶつ言っていないでひて」あつれえ、おかしいなまただよ。しかも今度は何かの衝撃まで」……………」「いじけんなよ！わざとに決まってるだろー（笑）」

さすがにからかいすぎたか。目の前で小石を蹴飛ばす仕草をしている真っ白い人（以下シロ）を見ながら思う。だっていちいち反応し

てくれるから面白いんだもんよーそっちがわかるかとよー。実はかれこれ三十分ほどのやり取りをしていた。あーおもしれー。

「昔のイリアは俺にやさしくしてくれた。謝っておきながら（笑、とか言わない」

「そこはたらいでドローだろ。んで、なんのようだよ人を勝手に気絶させやがってマゾのくせに人攻撃するとかマゾヒズムのルールに反してるつつのマゾはサドにいじめられるって学校で習わなかったのかよそれにこっちの都合も考えるいろいろとあんだぞ仕事とか試食会とか」

「まあいいや、いやさーちよつと話したいことがあつてさー」

「なんだよめんどくせー（本当！？是非聞きたいわ！何なの！？）」

「ちよ、心の声と逆！！それに俺はMじゃねえ。うーんとな」

「イリアは、先日死んだはずなんだよ」

シロの言葉を聞いて、私は疑問に思った。というかこう言わなきゃいけないね？世界広しといえど私がイリアに転生したとこ知らないはずだし。しかも記憶がないと言えるわけないよね？よし、隠し通そう。

「あれ……？」

『イリアは、先日死んだはずなんだよ』

さっきシロはそういった。もし（というより十中八九本当だろう）シロの言つとおりだったなら。

なぜ、私はここに（………）？

「そうなんだよ、そこがもんだいなんだよな」

「………！」

「なんでお前は生きてんだ？」

どつちやら、私は追い詰められたらしい。

第十一話（後書き）

無駄に長い。そしてストーリーが進まない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9457y/>

零の錬金術師

2012年1月14日18時53分発行